

# ベランダバードウォッチ 2021 年冬調査報告

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木県支部

関東など東日本の平野部では、サクラの季節も終わり街中をツバメが飛び交う季節になりました。2021 年の初冬期は気温が高かったものの、12 月中下旬には寒気の南下で日本海側では大雪になり、その後も日本海側や北日本では雪の多い冬でした。このような山地や北日本などで積雪の多い冬は、市街地周辺など身近な環境に生息する鳥たちの生息状況に何らかの影響を及ぼしたのでしょうか。特に、積雪のほとんどない太平洋側の平野部の地域では積雪を避けた鳥たちで越冬個体数など多かったのでしょうか。以下に、2021 年 10 月から 2022 年 2 月末（以下 21 年冬）のベランダバードウォッチの結果を報告いたします。

## 調査状況

2021 年冬の調査は、北海道から九州までの合計 56 名によって、家での調査が 35 か所、家の周りの調査が 42 か所で行なわれました（図 1）。冬の調査地数は、2019 年に急激に増加しましたが、昨年から両調査とも調査地数が減少傾向にあり、今冬はさらに減少してしまいました。地域別では、両調査とも関東地方が最も多く両調査を合わせると全体の 58%を占めました。家の周りの調査では 2 番目に多かったのは中部地方でした（図 2）。また、例年東北地方や北海道の調査地は少ないのですが、今冬は少し増加しました。一方で、昨冬と比べると中国地方の調査地が減ってしまったのは残念です。

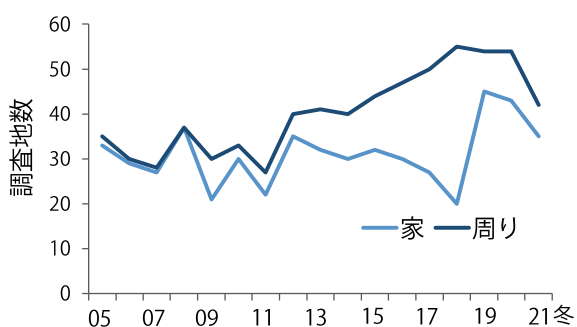


図 1. 調査地数の推移

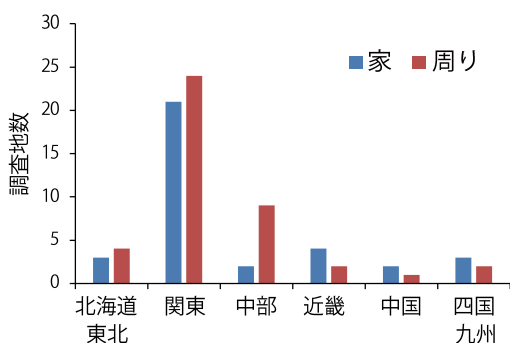


図 2. 2021 年冬の地域別の調査地数の比較

## 記録種

付表に、2021 年 10 月から 2022 年 2 月末（家での調査は 12 月 1 日から）までに記録された種をまとめました。家での調査 61 種、家の周りの調査 105 種で合計 107 種（種不明を除く）が記録されました。記録された種数は、両調査とも 20 年冬より 5-6 種少ないものの概ね同じでした。記録された種を見ると、家の周りの調査では調査範囲が家での調査より広いことから、カモ類やサギ類、シギ・チドリ類など水辺の種が多く記録されました。やはり、調査地を選定する際に、鳥の多い河川など水辺を選ぶ傾向があるのかもしれませんが。さらに、例年と同様に記録種にはツバメやイワツバメ、ノビタキ、コサメビタキ、キビタキなどの夏鳥の種も多く記録されています。これは、家の周りの調査では調査期間が 10 月から 2 月のため、渡り途中の夏鳥が記録されたためです。

## 記録率上位 15 種の記録率の比較

表 1 は、21 年冬の両調査の記録率上位 15 種を比較したものです。記録率の算出方法は、各種の記録された合計回数をそれぞれの調査の全調査回数で除した値です。また、21 年冬と 20 年冬を比較するために 20 年冬の記録率上位種も併記しました。この表から上位 3 種は、ヒヨドリとスズメ、ハシブトガラスで家での調査と家の周りの調査とも両年で同じでした。さらに、記録種を 15 位までを見ると、両調査での出現種の違いは 2 年間で 1 種あるいは 2 種でした。したがって、調査範囲は両調査で異なっているものの、身近な環境で頻繁に記録される鳥の種は同じ傾向があることがわかります。そして、表 1 に示したこれら 15 種が今回の身近な調査

表1. 家での調査と家の周りの調査の直近の2年間の記録率の比較

No.	家での調査			家の周りの調査				
	2021年	2020年	2021年	2021年	2020年			
1	ヒヨドリ	0.71	ヒヨドリ	0.84	ヒヨドリ	0.95	ヒヨドリ	0.95
2	スズメ	0.60	スズメ	0.72	スズメ	0.85	スズメ	0.82
3	ハシブトガラス	0.47	ハシブトガラス	0.55	ハシブトガラス	0.80	ハシブトガラス	0.77
4	ムクドリ	0.41	メジロ	0.51	シジュウカラ	0.69	シジュウカラ	0.75
5	ハシボソガラス	0.33	キジバト	0.46	メジロ	0.68	メジロ	0.69
6	メジロ	0.32	ハシボソガラス	0.40	ハクセキレイ	0.68	キジバト	0.68
7	キジバト	0.31	ムクドリ	0.37	キジバト	0.67	ハクセキレイ	0.66
8	シジュウカラ	0.19	シジュウカラ	0.34	ハシボソガラス	0.63	ハシボソガラス	0.62
9	ハクセキレイ	0.18	ツグミ	0.33	ムクドリ	0.60	ムクドリ	0.61
10	ジョウビタキ	0.14	ジョウビタキ	0.22	ドバト	0.51	ツグミ	0.52
11	ツグミ	0.13	ハクセキレイ	0.21	モズ	0.47	ジョウビタキ	0.52
12	ドバト	0.10	ドバト	0.18	ジョウビタキ	0.41	ドバト	0.48
13	シロハラ	0.08	カルガモ	0.15	カワラヒワ	0.35	モズ	0.47
14	カルガモ	0.07	ヤマガラ	0.13	ウグイス	0.33	コゲラ	0.37
15	モズ	0.05	コゲラ	0.12	ツグミ	0.33	ウグイス	0.37

記録率は各調査とも記録回数を全調査回数で除した値。

地での主要な鳥たちと言えます。しかし、家での調査と家の周りの調査を比較すると、今回も記録率は家での調査の方が家の周りの調査より全体的に低い傾向がありました。このような傾向は昨年までも同じで、両調査の調査範囲や調査回数の違いによるものと考えられます。家での調査は、自宅のベランダや庭先の狭い範囲での観察で、調査回数も1シーズンに原則5回です。一方、家の周りの調査では自宅から概ね200mの範囲で10日ごとに観察した種と最多個体数を概数で報告します。そのため、調査範囲の広い家の周りの調査では家での調査より多様な環境が含まれ、それぞれの種の記録個体数も多いためと考えられます。しかし、調査範囲が異なっても、記録率上位種の顔触れは両調査でほぼ同じです。

### 家の周りの調査における主要な冬鳥の記録状況

3年間継続して調査された21か所の調査地における代表的な冬鳥4種の10日ごとの記録率の変化をみると、21年冬のツグミとシロハラ、シメの記録率は3年間で最も低いことが見てとれます(図3)。

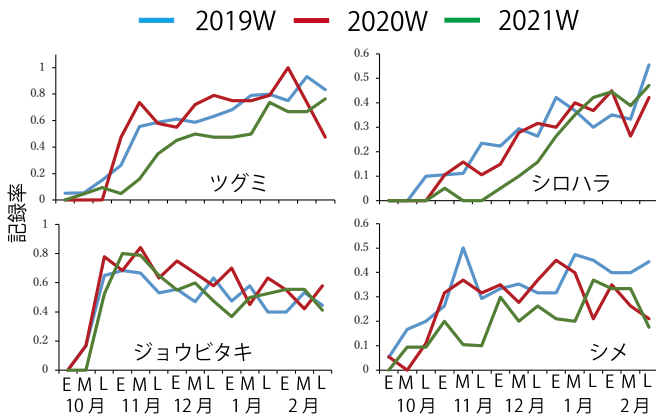


図3. 家の周りの冬の調査における3年間の記録率の比較

特にシロハラの記録率は、1月中旬までは過去2年より著しく低く推移し、1月下旬になって前年の冬並みに上がりました。また、21年冬のジョウビタキとシロハラではこの3年間で10月の出現が約10日遅いことがわかりました。

次に、家の周りの調査での個体数ランク別の3シーズンの記録率を比較しました(図4)。ツグミ、シロハラ、シメは1-2羽の個体数ランクでは調査年で差が小さかったものの、3-5羽以上のランクで21年冬の記録率の低さが顕著でした。一方、周年生息するカワラヒワでは、6-20羽以上の大きな群れの記録率に調査年での違いがありませんでした。

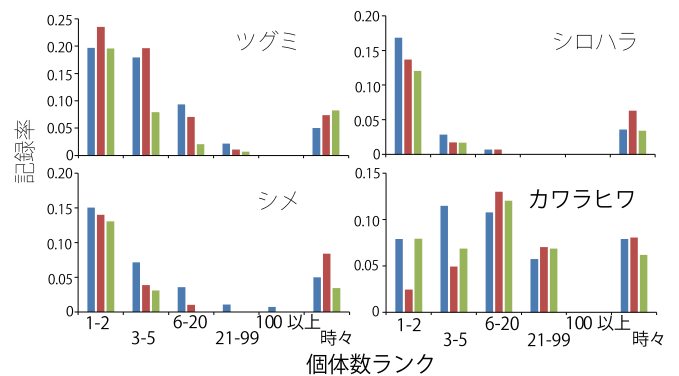


図4. 家の周りの調査における3年間の個体数ランク別記録率の比較

### 家での調査による冬と夏の記録率の比較

家での調査の全調査地に基づいた住宅地周辺に生息する留鳥5種の21年夏と冬の調査地における記録率の比較はメジロを除く4種では21年夏の方が21年冬より記録率が高いことが見てとれます(図5)。

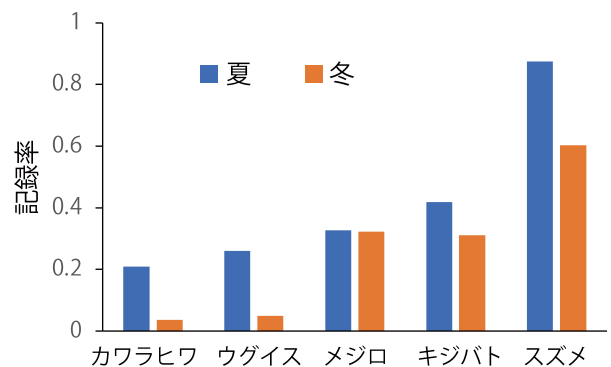


図5. 家での調査における主要5種の21年夏と冬の記録率の比較

特に、カワラヒワとウグイスでは季節による違いが顕著でした。カワラヒワについては20年冬の報告でも述べましたが、おそらく冬は郊外の方が食物となる植物の種子などが多いために、秋冬期には市街地から郊外へ移動することがその理由と考えられます。おそらく、同様な理由でスズメやキジバトも夏の方が冬より記録率が高い理由と思われる。さらに、夏の調査では巣立ちした若鳥が含まれるため、個体数が多いことで目視されやすく、記録率も夏の方が高いのかもしれませんが。一方で、ウグイスでは夏の方が冬より記録率が著しく高いのは、春から夏には大きな鳴き声で頻繁に囀るために、地鳴きで鳴く冬より生息の確認がし易く記録率が高いものと思われる。したがって、季節による記録率の違いは、それぞれの種の社会行動や食物量の違いなども関係していると考えられます。なお、メジロの記録率は20年冬では夏より著しく記録率が高かったのに、21年冬では夏と冬でほとんど違いがありませんでした。この理由として、両年での調査地の違いによるものや、21年冬ではメジロが住宅地付近に少なかったなどが考えられますが、現時点では良くわかっていません。22年繁殖期や冬季の調査でも注目してみたいと思います。

### 家での調査地での3種の記録個体数の比較

住宅地にも生息するツグミ、シメ、カワラヒワの記録状況を3シーズン調査が実施された20か所で平均個体数を年毎に比較すると、ツグミでは、21年冬の平均個体数が他の2年より多かったのはわずか3か所だけでした(図6)。特に3年間に少なくとも1回は記録された18か所の調査地のうち、21年冬に1度も記録されなかった調査地が6か所ありました。一方、シメとカワラヒワは、3年間で少なくとも1回以上記録された調

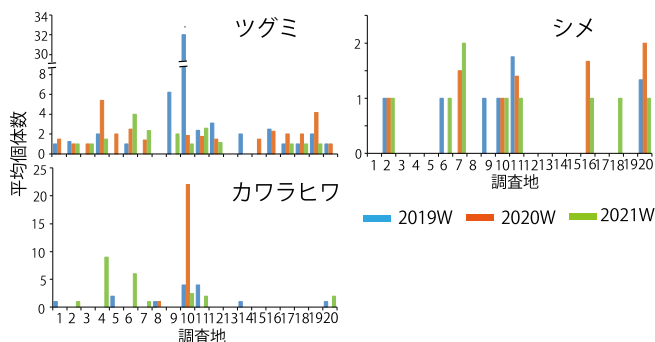


図6. 家での調査地での3種の3年間の平均個体数の比較

査地はシメが6か所、カワラヒワが10か所とツグミより少なく、平均個体数もシメではせいぜい2羽前後と少数でした。さらに、シメでは3年のうちで21年冬に平均個体数が多かったのは2か所だけでした。記録された調査地が少ないため、調査年での記録個体数を比較するのはあまり適切ではありませんが、家の周りの調査同様に、家での調査でも21年冬はツグミやシメが少なかった可能性があります。

### 2021年冬の調査のまとめ

21年冬は、冒頭でも記したように北日本や日本海側の地域では雪の多い冬でした。そのため、ツグミやシロハラ、シメなどの冬鳥は積雪の少ない関東や太平洋側の地域に多数飛来し、越冬するのではないかと期待しました。しかし、21年冬のベランダバードウォッチの結果からは、ツグミやシロハラ、シメといった身近な環境に生息する冬鳥は予想に反して個体数が少なかった可能性が示唆されました。関東北部の栃木県の都市公園ではシメやアトリなどが好んで食べるカエデ類やケヤキなどの種子が豊作にもかかわらずシメなどが少なく、春先までたくさんの種子が枝に残っていました。一方、ベランダバードウォッチの調査地の多くは市街地付近に位置します。そのため、郊外の林や農耕地には木の実や植物の種子が多くあり、これらの鳥たちは市街地付近を利用しなかったのでしょうか。関東北部では少なくとも初冬期には山地の森林に多数のツグミやシメたちが群れて記録されてはいなかったように思います。より北の山地にいたのでしょうか？それとも何らかの理由で繁殖成績が悪く、日本に飛来する個体数が少なかったのでしょうか。これらを明らかにするには同じ調査地で継続した調査を実施し、植物の種子などの豊凶を記録することで、解明の一助になるのではないかと思います。今回ははっきりした理由はわかりませんでした。今後も継続して調査することで越冬期の変動の要因が解明されるのではないかと思います。そのため、公園などの木の実の生り具合も記録しておくのも重要と思われます。カエデ類などの木の実の豊凶は1年ごとに変わる人が多いようです。果たして2022年冬の市街地における鳥たちの生息状況はどのようなものなのでしょうか。今から楽しみです。

長年にわたって調査を継続することは、労力的にも

体力的にも困難を伴います。日本の鳥たちの生息状況の変化を少しでも解明できるように、今後ともご協力いただけましたなら嬉しい限りです。

末尾ながら調査にご参加いただきました皆様のお名前を記してお礼に代えさせていただきます。

秋元玲子, 渥美美保, 天沼弘勝, 五十嵐勉, 生野満, 石原渉, 入船憲一, 梅原淳子, 及川茂, 大出水幹男, 大井智弘, 大塚啓子, 加藤智子, 加藤美奈子, 川畑紘, 黒沢令子, 後藤未央, 小林尹夫, 小林俊子, 近藤盛文, 坂口凜太郎, 坂田樹美,

笹倉千江花, 佐藤一博, 佐藤司, 須田由美, ソウザキマユミ, 大門明美, 大門聖, 高橋和代, 高橋佳子, 高山裕子, 滝澤三郎, 武居佳子, 武谷由紀子, 辰巳文吾, 田中利彦, 田辺英樹, 津野光, 長嶋宏之, 西川光一, 西田好恵, 丹羽和夫, 野村英樹, 東出幸真, 菱田清和, 藤原淳子, まっちゃん, 三田長久, 三藤文彦, 三堀智子, 宮崎朋子, 安田耕治, 吉中康展, 吉邨隆資の各氏。

とりまとめ：平野敏明

付表. 2021年冬季の記録種一覧

No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り
1	キジ	○	○	37	オオタカ	○	○	73	ゴジュウカラ	○	○
2	マガン	○		38	ノスリ		○	74	ムクドリ	○	○
3	オンドリ		○	39	フクロウ	○	○	75	トラツグミ		○
4	オカヨシガモ		○	40	カワセミ	○	○	76	マミチャジナイ		○
5	ヨシガモ	○	○	41	アリスイ	○	○	77	シロハラ	○	○
6	ヒドリガモ		○	42	コゲラ	○	○	78	アカハラ		○
7	マガモ	○	○	43	オオアカゲラ	○	○	79	ツグミ	○	○
8	カルガモ	○	○	44	アカゲラ	○	○	80	ルリビタキ	○	○
9	ハシビロガモ	○	○	45	アオゲラ	○	○	81	ジョウビタキ	○	○
10	オナガガモ		○	46	ヤマゲラ	○	○	82	ノビタキ		○
11	コガモ	○	○	47	チョウゲンボウ		○	83	イノヒドリ	○	○
12	キンクロハジロ		○	48	ハヤブサ		○	84	エゾビタキ		○
13	カイツブリ		○	49	サンショウクイ	○		85	コサメビタキ		○
14	カンムリカイツブリ		○	50	モズ	○	○	86	キビタキ		○
15	キジハト	○	○	51	カケス	○	○	87	スズメ	○	○
16	カワウ	○	○	52	オナガ	○	○	88	キセキレイ	○	○
17	ゴイサギ		○	53	ミヤマガラス		○	89	ハクセキレイ	○	○
18	アオサギ	○	○	54	ハシボソガラス	○	○	90	セグロセキレイ	○	○
19	ダイサギ	○	○	55	ハシブトガラス	○	○	91	ビンズイ	○	○
20	チュウサギ		○	56	キクイタダキ		○	92	タヒバリ		○
21	コサギ	○	○	57	ハシブトガラ	○	○	93	アトリ		○
22	ヒクイナ	○	○	58	ヤマガラ	○	○	94	カワラヒワ	○	○
23	バン		○	59	ヒガラ	○	○	95	マヒワ		○
24	オオバン	○	○	60	シジュウカラ	○	○	96	ベニマシコ	○	○
25	タゲリ		○	61	ヒバリ	○	○	97	シメ	○	○
26	ケリ		○	62	ツバメ	○	○	98	イカル	○	○
27	イカルチドリ		○	63	コシアカツバメ		○	99	ホオジロ	○	○
28	タンギ		○	64	イワツバメ		○	100	ホオアカ		○
29	クサシギ		○	65	ヒヨドリ	○	○	101	カシラダカ	○	○
30	イソシギ	○	○	66	ウグイス	○	○	102	アオジ	○	○
31	オジロトウネン		○	67	エナガ	○	○	103	オオジュリン		○
32	ユリカモメ		○	68	オオムシクイ		○	104	コジュケイ		○
33	ミサゴ	○	○	69	メボソムシクイ		○	105	ドバト	○	○
34	トビ	○	○	70	メジロ	○	○	106	ホンセイインコ	○	○
35	ツミ	○	○	71	オオヨシキリ		○	107	ガビチョウ		○
36	ハイタカ	○	○	72	セッカ		○			61	105